

樹木葬会員の意識からみた樹木葬墓地の今後の課題

金亮希*

Future Issues of Afforested Burial Grounds as Perceived by the Afforested Burial Membership

Yanghee KIM*

1. はじめに

近年、日本では少子化・核家族化といった家族構成の変化が進んでいる。それに伴い墓地の継承及び無縁墳墓の増加といった問題が顕在化し、葬送や墓形態の多様化が進んでいる。1998年に厚生科学特別研究事業として実施された「墓地に関する意識調査」でも墓地に関する社会問題として墓地価格高騰、墓地不足につづいて墓地継承の問題に対する認識が高くなってきたという結果が報告されている。この調査結果の主任研究者である森は継承者のいない墳墓増加問題への認識の傾向が明確になったとしている¹⁾。また東京都公園審議会の「都立霊園における新たな墓所の供給と管理について」の答申では今後の墓所需要動向の一つとして継承を前提としない墓所需要の高まりを挙げている²⁾。以上のように墓地をめぐる継承の問題とこれに伴う無縁墳墓の問題は次第に大きくなっていることが分かる。

一方で1990年代に入ると散骨などの自然葬に注目が集まる。日本での散骨は「葬送の自由をすすめる会」が積極的に推進しており、海での散骨が多く行われてきた³⁾。1999年には里山を活用しながら散骨とは異なる樹木葬が登場する。自然で行われることや墓石を設けないといった点では共通しているが、樹木葬は焼骨を撒くのではなく埋めるということで墓地として許可を得た場所で行われる点が異なっている⁴⁾。こういった散骨や樹木葬は上記で述べてきた近年の墓地問題における自然志向の傾向の現れであるともいえる。樹木葬はドイツや韓国でも実行されており、特に韓国では2007年の法律改正で「自然葬地」の一つとして「樹木葬林」が定められた⁵⁾。この法律改正後さらに樹木葬への関心は高まっている。韓国の山林庁は樹木葬のモデルとして「樹木葬林」を京畿道にある国有林の一ヶ所で行おうとしている。すでに間伐や道の整備、その他の便益施設設置などは進めており、2009年から国民への使用を許可する予定である。

日本での樹木葬は、里山を乱開発から守り持続的に里山の手入れを行うことで里山放置の状況を改善し、地域の自然環境を豊かにすることを目的に始まった⁶⁾。以来樹木葬は年々増加傾向にあり、里山保全を目的としたもの以外にも公園墓地への応用などといった様々な形態で設置されている⁷⁾。こうした多様な形態になりつつある樹木葬に対して、金・永田⁸⁾は樹木葬を「墳墓に焼骨を直接埋蔵し、地上に樹木を植える葬送方法」とあり、新しい葬送方法の一つとして定義づけた。その上樹木葬墓地を「里山の保全のために樹木葬を実施する墓地」と限定しており、樹木葬墓地が里山保全を担う新たな形態の墓地であるとし、様々な形態で発展している樹木葬と

* 東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻

* Lab. of Forest Policy, Department of Forest Science, Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

樹木墓地とは区別している。

一方、従来の寺院墓地や公営墓地、民間の公園墓地とは異なる樹木葬を選択する人はどういう人であるか、なぜ樹木葬を選んだのか。これらの疑問に関しては井上（2003）が2002年に岩手県一関市の知勝院で実施した「樹木葬墓地申込者の意識調査」で伺うことが出来る。この調査では樹木葬墓地申込者の属性について性別では女性のほうが約2割多く、年齢は60代が44.8%で一番多いという結果が出ている。そして死別や離別を除く既婚が57.9%で一番多く、子どもの構成は娘・息子が43.1%で一番多く、次に娘だけが33.6%、息子だけが23.3%という結果が出ている。さらに井上は樹木葬を申し込んだ理由などについて調査の結果から「脱継承」と「自然志向」を樹木葬に求めていることを明らかにした。こうした樹木葬を選んだ理由についての傾向は知勝院及び天徳寺での筆者の聞き取り調査からも確認できる。しかし井上の調査は、家族制度の変化の中で従来の契約条件とは異なる、継承者を必要としない墓地という視点から樹木葬を捉えたものであり、樹木葬を選択した人達が樹木葬墓地を設置者が目的にあげる里山保全に対してどのような意識を持っているかを把握しようとしたものではない。樹木葬を取り上げている田口（2002）、黒田（2006）、金田（2002）も樹木葬を自然を生かした新しい葬送の一つとして扱い、前述したように継承者問題や自然志向の理由から樹木葬が選ばれていることに焦点を当てて記述している。これらの文献でもやはり樹木葬墓地の目的である里山保全についてはあまりふれていない。ここで確認しておきたいのは樹木葬墓地は里山保全のために多くの人の参加を期待していることを理由として、従来の寺院墓地のような宗教や宗派の制限、檀家の義務といった契約条件は設けておらず、井上などの先行研究で言う近年の墓地に求められる「脱継承」や「自然志向」のニーズに応える墓の提供だけが目的でないことである。こうした点を踏まえ本研究では前述した金・永田（2008）が限定した「樹木葬墓地」を前提に、樹木葬墓地による里山保全に注目して論じていくことにする。さらに前述した先行研究が樹木葬を選ぶ側に焦点が当てられる傾向になったが、本研究では樹木葬墓地を選ぶ側はもちろん樹木葬墓地を提供する側といった両者に焦点を当てて述べることにする。

上述したように樹木葬墓地は墓地として許可を得た土地であるが、「樹木葬墓地」という法規定が定められているのではなく、一般の墓地と同じ行政手続きを踏まえて経営の許可を得たものである。金・永田（2008）によれば墓地の境界を明確にするための障壁や各墳墓に接触する道路、区画の区分など実際の条例の規定には細かく決まっていない点などもあり、こういった点に関して樹木葬墓地に対しては里山保全の目的を持っていることを勘案して行政裁量で許可を出したとしている。こうした行政側の配慮に関しては千葉県いすみ市環境生活部環境保全課への電話による聞き取りでも確認された。このように、樹木葬墓地での遺骨を直接埋める方法や既存の墓地に比べ自然を残した形で墓地の整備ができたのは、里山保全を目的としているためと考えられるのである。

里山保全に関してはこれまで多くの研究者が言及してきており、里山保全にも様々な形がある。まず、里山とは奥山の対義語であり⁹⁾里山の定義はこれを扱う分野によって多少差異があり、言葉の表現も色々で里山、里山林、雑木林、農用林などがある。四手井¹⁰⁾は里山は村里に近い山という意味で、林学でよく用いる農用林を里山と呼ぶものであるとした。また農用林に関して武内は伝統的な農業生活における樹林の役割を表現した言葉であり、伝統的な農業に不可欠な堆肥を作るために必要な林で、人為によって成立した「二次林」であるが、戦後、農業や人々の生活が化学肥料や化石燃料に依存し始めると、薪炭林や農用林の役割が低下したという。さらに深

町¹¹⁾は「日常生活および自給的な農業や伝統的な産業のため、地域住民が入り込み、資源として利用し、攪乱することで維持されてきた、森林を中心にしたランドスケープ」と里山を定義している。そして森林・林業・木材辞典の中では「里山林」を「農山漁村集落周辺にあり、かつては薪炭やシイタケ等の特用林産物を生産するなど人と深いかかわりを有していた森林」と定義している¹²⁾。

以上のように里山に関する説明や定義は様々であるが、里山を限定する上で重視すべきこととしては「人との深い関わり」を持っていて「生活の営みになっていた林」であるといった点である。しかしもう一つ問題なのは里山の範囲を地理的にどう限定するのかという点である。これに関して本稿ではかつての薪炭林及び農用林、例えば農業のために転換した農地も含め地域住民の生活に身近に関わってきた広い範囲までの土地空間を里山として捉えたい。このような意味では本稿で取り扱う里山の意味は里地¹³⁾もしくは深町が定義した「里山」に近いといってもよいだろう。

一方で武内の指摘のように戦後、特に1955年から1965年の間は里山林利用の転換期であり、工業化・産業化による経済発展と共に里山の役割は低下し都市への人口流動により人との関わりも次第に薄れてきた。かくして全国的に管理放棄された里山が増加するようになり、また里山の大規模な開発が進み里山保全の問題が顕在化した。林業白書¹⁴⁾でも里山の管理放棄による森林のもつ多面的な機能の発揮への阻害が指摘されている。

こういった中、近年、里山が成す地域独自の自然景観や里山の持つ生物多様性などのような里山への評価が見直され、里山保全のためには持続的な管理が必要であるとし、様々な管理主体による活動が活発になっている。また色々な取り組みも始まっている。こういった様々な里山保全活動に対し奥¹⁵⁾は里山全体を保全することは市民活動では管理可能な里山の規模に限界があり、その活動は「労働力」としてではなく、里山管理に対する理解者をいかに生み出していくかということに焦点をあてるのが適切であるとしている。かつては地域住民により利用・管理され変化してきた里山が今日になってはレクリエーションや教育の場などとして地域の外部者によりその利用・管理が行われている場合も多くなっている。しかし、地域住民によるかつてのような里山の利用・管理がままならぬ現在の状況での里山保全のためには前述した奥の指摘のように「労働力」としてではなく里山管理に対する多くの理解者が必要であると考えられる。

以上を踏まえて本稿で取り扱う里山とは「日常生活や農業などのために地域住民が利用・管理してきた森林及び農地を含む土地」であり、こういった「里山の管理放棄や、乱開発などによる里山景観・生態を破壊から守り、地域の自然環境及び生活を豊かにしていくこと」が里山保全であると考えて述べることにする。

先に述べた奥の指摘のように樹木葬墓地の場合においても里山の持続的な管理には多くの理解者が必要であることは同様である。自然志向や継承者の問題が樹木葬を選択する大きな理由になっているとしても将来的に里山を管理していくうえで、いかに里山保全という経営・管理側の趣旨を理解してもらうのが重要であると思われる。実際に樹木葬墓地では契約者に地域の自然を理解し、愛着を持ってもらうため地域の自然体験研修など様々な集いが行われ、地域との交流も図られている。里山保全を目的とする樹木葬墓地における持続的な里山の管理はこういった理解者と経営・管理側による共通認識の醸成から始まるのではないだろうか。

そこで本研究ではまず樹木葬をどういった人たちが選ぶのか、その属性を明らかにしたうえで、里山保全への認識度及び地域活性化¹⁶⁾への影響を明らかにする。最後に明らかになった諸

点から今後の樹木葬墓地による持続可能な里山保全のため、また地域活性化への効果を高めるための課題について考察を行うことにする。

2. 調査方法

アンケート調査は前述した金・永田（2008）で定義された樹木葬墓地に合致する里山保全を目的とし、また地域活性化への貢献をも念頭に樹木葬墓地を実施している千葉県いすみ市に所在する天徳寺の樹木葬墓地の会員を対象に行った。調査方法は2007年1月に天徳寺経由で全会員に254通の調査票を郵送していただいた。調査票は大きく三つに区分して構成した。具体的には一つ目は樹木葬をどういった人が選んでいるのかを把握するため属性についての質問項目を、二つ目は一般的な樹木葬についての評価及び樹木葬墓地による里山保全に対する意識に関する質問項目を、三つ目は天徳寺の樹木葬墓地についての評価及び樹木葬墓地にどのように関わっているのか、また地域への影響はどのようなものなのかといった質問項目で構成した。また井上が2002年に知勝院で実施した調査票及び1998年の厚生科学特別研究事業である「墓地に関する意識調査」の調査票を参考にしながら質問内容を作成した。調査票の回収期間は2月5日～3月9日の33日間で2月末に一回督促状を出した。回収率は67.7%、有効回答数は166人であった¹⁷⁾。調査結果はまず単純集計を行い、特に樹木葬会員の性別及び年齢別での特徴を明らかにするため男女別と年齢別でのクロス集計を行った。さらにクロス集計に関してはカイ二乗検定を行った。またその他著者が関連性があると判断した質問項目についてもクロス集計を行った。

複数選択の質問項目に関するクロス集計ではカイ二乗検定を行う場合、選択肢ごとにカイ二乗検定を行った。

3. 天徳寺の樹木葬墓地の現況

天徳寺は千葉県いすみ市大原山田1886に所在しており天徳寺の樹木葬墓地は2004年7月に開始された関東で許可を得た初の樹木葬墓地である。樹木葬墓地の面積は約5,000㎡で約400区画

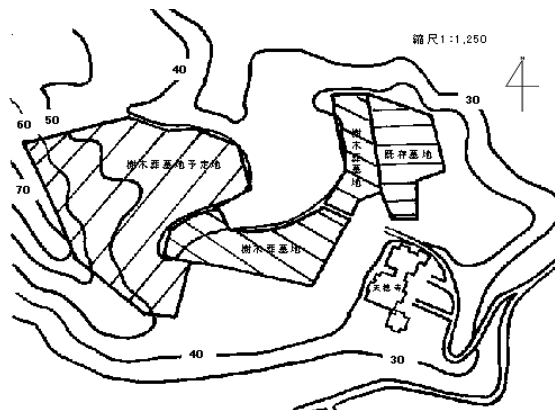


図-1 天徳寺及び樹木葬墓地配置図

Fig. 1. Tentokuji and Plot Plan of Afforested Burial Grounds

注) 配置図は平成7年大原町が作成した地図を基に樹木葬墓地などを表示したものであり、地図及び墓地等の位置の情報は天徳寺に提供してもらったものである。

が整備されている。樹木葬墓地を始めた理由に関しては天徳寺の住職二神成尊氏（以下、二神氏）によれば地域環境の保全と地域活性化への貢献のためであるという。

天徳寺では二種類の埋蔵が行われており、一つ目は焼骨を埋蔵し墓石を立てず樹木を植える方法で行われる樹木葬、二つ目はあらかじめ植えてある桜の木の下に焼骨を埋蔵する方法で行われる桜葬である。2008年8月末現在契約件数は470件でありその内82件は桜葬である。実際に173ヶ所の樹木葬及び34体の桜葬が行なわれた¹⁸⁾。天徳寺では現在樹木葬墓地として使用している場所以外に樹木葬墓地の後背地にあるスギ人工林約50,000㎡を将来的には樹木葬墓地にする予定である。すでに約8,000㎡の皆伐などの整備を始めており、里山にスギを残さず、在来種の木を植えることで本来の里山の姿に取り戻していく方針であり、皆伐の後の再造林にはコナラとクヌギを植える予定である。皆伐で出たスギ約100本は近くの製材所で材木にし、将来使用する目的で寺のほうにストックしている。

樹木葬は区画の中央部分に穴を掘り焼骨を入れその脇に木を植え、木製の墓標を立てる順番で行なわれる。樹木葬で植栽できる樹種は大樹になるもの以外に樹種の制限はなく、天徳寺または会員が用意した木を植栽できる。さらに区画の中ではガーデニングもある程度許されているが、ガーデニングした花などの管理は寺のほうでは行わない。区画の使用期限は最後に行われた埋蔵から33年間で、これは33回忌である弔い上げの意味を持ち、死者が魂となる年である。これまでの期間内は天徳寺霊園管理使用規則第9条の(1)によれば樹木が枯れたり、倒れたりした場合は再植栽などといった樹木の管理を行なうが、期限が過ぎたら樹木が枯れたり倒れたりしても新しく植え換えることはなく、天徳寺での聞き取りによれば区画の一部を新たに貸すこともありえるという。しかしこれに関してははっきり決まっていることではなく、里山として樹木葬墓地全体を管理していくことが前提であって個別の区画に関しては様子を見ながら今後の管理方針を展開させていくということである。

樹木葬の一つの区画は約38体まで使用でき、最初の1体の使用料は65万円だが、2体目よりは10万円であり、希望であれば血縁関係でない者でも同じ区画を使用することができる。管理費は年間8,000円である。桜葬の場合の使用料は1体につき20万円管理費は年間5,000円である。樹木葬や桜葬の使用料の一部はインド、インドネシアなどの子供への支援及び植林などの森林保護のために活用されている¹⁹⁾。樹木葬と関連しての行事としてはまず、月に一回程度で樹木葬に関する説明や現地での見学といった見学会を行なっている。見学の日好きな区画を選び予約をすることや契約を結ぶことも可能である。見学会の他には1年に3回のペースで「樹木葬会員の集い」として地域住民の協力で提供してもらった山でのタケノコ掘りや故人を偲ぶ会などが行なわれている。こういった行事ではさまざまなテーマで地元の自然に触れ、地域との交流ができ、また樹木葬の会員同士間の交流ができることはもちろん地域住民も参加し手伝いをするなど地域住民との交流も出来る。後述する天徳寺で契約を結んでいる農家の方も来られる。

二神氏は地域での寺の役割がとても重要であるとし、地域の自然環境保全や農業の活性化などにより地域の自然や経済が豊かになることに寺が貢献できることを望んでいるという。

さらに天徳寺では地域農業の活性化と地域環境保全を目的に地域農家一軒と米の有機栽培を前提とした独占契約を結びこの農家で作る米はすべて買い上げ、樹木葬会員にもこういった趣旨を伝え販売している。米は年間1,800㎏入荷し、その内200㎏は「樹木葬会員の集い」などでの食事に出され、また1,600㎏を販売しているが完売になる。また二神氏によればこの地域ではかつてはゲンジボタルなどといった地域の生物が生息していたが、今は農業などでの汚染により見

れなくなっているという。こういったことから安定した出荷先が決まることで、地域の生態系を考慮した自然にやさしい米作りができるとの二神氏の考えから米を販売している。

一方で里山に関する定義は様々であるが、前述したように本稿では里山を「日常生活や農業などのために地域住民が利用・管理してきた森林及び農地を含む土地」とした。またこのような「里山の管理放棄や、乱開発などによる里山景観・生態を破壊から守り、地域の自然環境及び生活を豊かにしていくこと」が里山保全であるとした。天徳寺で樹木墓地として活用しているところは戦後食料のために畑として利用していたところであり、さらにこの樹木墓地から得られた資金で樹木墓地の予定地である管理放棄されていたスギ人工林も整備を進めている。このスギ人工林も里山の風景に返しつつ保全していく計画であり、本稿で扱う里山保全として捉えることができ、天徳寺での樹木墓地の実行は十分に里山保全の方向にあるといえる。

4. 調査結果と分析

4-1 樹木葬会員の属性

本節では樹木葬の会員はどういった人であるのか、属性について分析を行う。

まず樹木葬の会員に関しては、二神氏によれば樹木葬を希望し直接契約を結んだ人以外に、樹木葬を希望しているが何らかの事情により家族などが代理で契約を結ぶ場合もあり会員が必ずしも全員契約者でないとのことで、まずは回答者が樹木葬の契約者であるか聞いてみた。樹木葬の契約者であるという答えが144名で87%、契約者ではないという答えが22名で13%であった(n=166)。

次に樹木葬の契約者であるかどうかという書類上の問題ではなく、樹木葬を希望しているかどうかを聞いた。その結果、希望しているとの答えが162名で98%、無回答が4名で2%、希望しないという答えは無かった(n=166)。

無回答の4名については最初の契約者であるかどうかの質問で、全員契約者であったので、これは記入ミスあるいは二神氏の言う希望者の代理としての契約者と思われる。

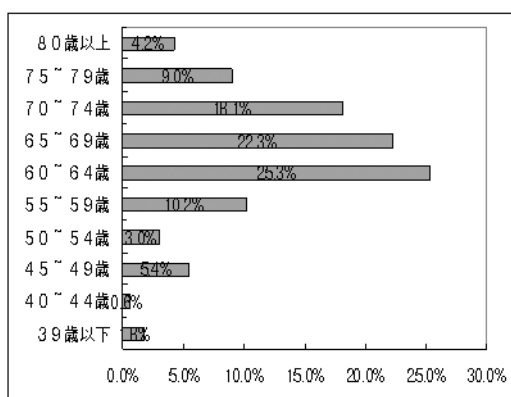


図-2 年齢 (n=166)

Fig. 2. Age (n=166)

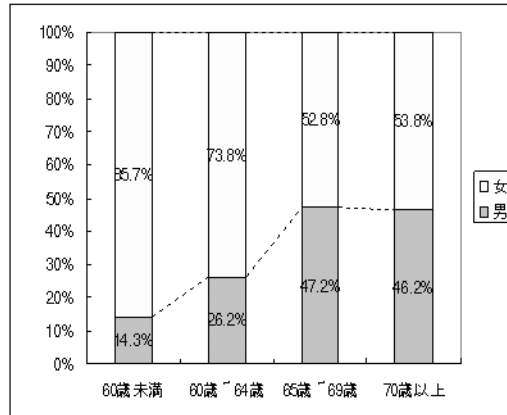


図-3 年齢別の男女 (n=165 60歳未満=35, 60歳～64歳=42, 65歳～69歳=36, 70歳以上=52)
 Fig. 3. Gender by Age (n=165 Under 60 years=35, 60～64 years=42, 65～69 years=36, Over 70 years=52)

注) 有意水準5%で $\chi^2=13.30$, $p=0.004$, $df=3$ であり帰無仮説が棄却された。

樹木葬の会員の男女の割合を見ると女性が65%、男性が35%で女性の方が約1.85倍多い(n=165)。この結果は井上の調査²⁰⁾で女性が59%という女性の割合が高い結果と同じ傾向をみせるが、天徳寺のほう約6%女性の割合が高い。また年齢の割合をみると60～65歳が25.3%で一番多く、次に65歳～69歳が22.3%で二番目に多い(図-2)。また一般的に団塊の世代と呼ばれている世代と定年退職の年齢である60歳以上の人が78.9%で高い割合を占める。この結果も井上の調査の60～64歳が23.5%、65～69歳が21.3%と60代が多いという結果と同様である。こういったことを踏まえ本稿では以後の年齢別とのクロス集計において定年である60歳を基準に年齢層を60歳未満、60歳～64歳、65歳～69歳、70歳以上の四つの区分で行うことにする。

そして年齢別の男女比に差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したところ帰無仮説は棄却され、有意差が見られた。60歳未満では女性が85.7%、男性が14.3%であり、女性の割合が約6倍にも及んでいる。また60歳～64歳では女性が73.8%、男性が26.2%で女性のほうが約2.8倍であり65歳未満の年齢層では女性の割合が圧倒的に高く、65歳以上の年齢層では男女の比率の差は7%以内となる(図-3)。日本の男女の平均寿命は2007年現在男性が79.19年で女性が85.99年であり²¹⁾、女性の平均寿命のほうが高く、高齢層になるほど女性の割合が多くなるはずである。しかし本調査結果のように高齢層で男女の割合がほぼ同じになるのは若齢層に比べ高齢層では墓地の契約において女性の決定権が弱いのではないかとと思われる。前述した樹木葬の実際の契約者と希望者が異なる場合においても契約者でないと答えた22名の内、21名が女性であり、全員が樹木葬を希望していることから契約において女性の場合直接契約を結べない何らかの制約があるのではないかと推察できる。

婚姻関係の質問に対する回答では「既婚」が93.3%、「未婚」が6.7%であり「既婚」の93.3%の中には「既婚(死別)」が33.9%、「既婚(離別)」が6.1%であった(n=165)。さらに男女別の婚姻関係には差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したところ帰無仮説は棄却された。「既婚」

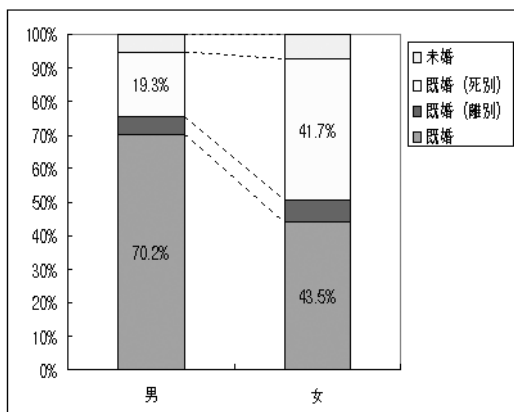


図-4 男女別の婚姻関係 (n=164 男=57, 女=107)

Fig. 4. Marital Status by Gender (n=164 Male=57, Female=107)

注) 有意水準5%で $\chi^2=10.84$, $p=0.012$, $df=3$ であり, 帰無仮説が棄却された。

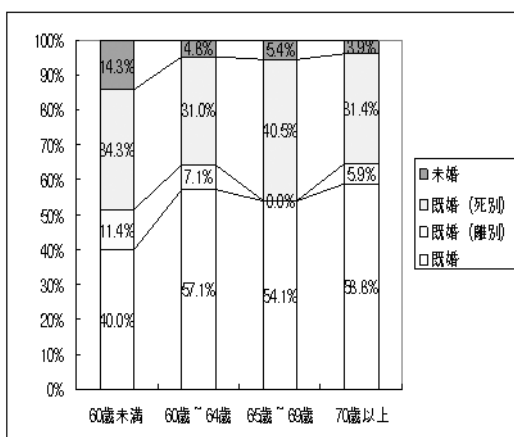


図-5 年齢別の婚姻関係 (n=165 60歳未満=35, 60歳~64歳=42, 65歳~69歳=37, 70歳以上=51)

Fig. 5. Marital Status by Age (n=165 Under 60 years=35, 60~64 years=42, 65~69 years=37, Over 70 years=51)

注) 有意水準5%で $\chi^2=10.18$, $p=0.335$, $df=9$ であり, 帰無仮説が棄却されなかった。

の割合は男性が94.7%, 女性が91.7%で男女共に90%以上と高い割合を占めるが, 詳細をみると「既婚(死別)」の割合は女性で41.7%, 男性で19.3%であり女性の方が男性より約2倍多い。また「既婚(死別)」や「既婚(離別)」でない「既婚」の割合は男性で70.2%, 女性で43.5%で男性の方が約1.6倍多い(図-4)。総じて女性の方が配偶者の居ない人が56.5%で男性に比べ多い。

一方で年齢別での婚姻関係には差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したが, 有意な差は見ら

れなかったが、「既婚」との回答は60歳未満では85.7%であり、これ以外の年齢層では「既婚」は90%以上で少し差があった。また「既婚」の詳細をみると「既婚（死別）」及び「既婚（離別）」を除く「既婚」は60歳未満で40.0%、60歳～64歳で57.1%、65歳～69歳で54.1%、70歳以上では58.8%であり、どの年齢層でも一番高い割合を占めている。「既婚（死別）」との答えも60歳未満で34.3%、60歳～64歳は31.0%、65歳～69歳は40.5%、70歳以上では31.4%であり、すべての年齢層で二番目に高い割合を占めている（図-5）。その上、「既婚（死別）」及び「既婚（離別）」及び「未婚」といった配偶者の居ない割合をみてみると60歳未満で60.0%であり、他の年齢層に比べ高い割合を占めている。さらに図-4のように女性の配偶者の居ない率は56.5%と過半数以上で、年齢別にみれば60歳未満が63.3%、60歳～64歳は41.9%、65歳～69歳は63.2%、70歳以上は59.3%であり、60歳未満の女性で配偶者が居ない人が65歳～69歳と0.1%の差であるが一番多い。これは60歳未満の女性は他の年齢層と比べ未婚率と離婚率の和がほぼ10%以上の差があり、未婚率は若年齢層でより高く、若い世代ほど離婚率も高い傾向があることからであろう²²⁾。

世帯構成に関する質問では「夫婦のみ」との回答が33.7%、次に「単独」が27.7%、「一人親と子」18.1%、「夫婦と子」が16.3%、最後に「その他」2.4%の順に高かった（n=166）。また世帯構成を男女別で見ると男性の場合は「夫婦のみ」が45.6%が一番高く、次に「夫婦と子」が21.1%、「単独」が17.6%、「一人親と子」が14.0%の順に高かった。女性の場合は「単独」が33.3%、次に「夫婦のみ」が26.9%、「一人親と子」が20.4%、「夫婦と子」が13.9%の順に高く、女性の場合が男性より「単独」世帯が約2倍多かった（図-6）。なお、男女別で世帯構成には差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したところ有意差は見られなかった。一方で年齢別での世帯構成には差がないとの帰無仮説のカイ二乗検定では有意差がみられ、特に「夫婦のみ」の世帯構成は60歳未満で8.6%、60歳～64歳で33.3%、65歳～69歳で32.4%、70歳以上で51.9%であり、年齢層間で一番差が大きかった（図-7）。これは図-5の結果のように「既婚」が60歳未満で一番少なく、70歳以上で一番多かったことを反映すると思われる。また「単独」世帯は60歳未

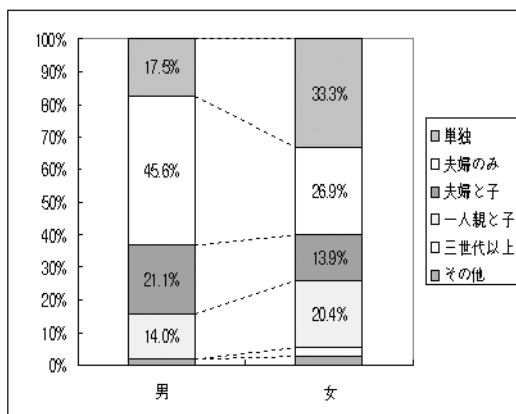


図-6 男女別の世帯構成 (n=165 男=57, 女=108)

Fig. 6. Household composition by Gender (n=165 Male=57, Female=108)

注) 有意水準5%で $\chi^2=11.01$, $p=0.051$, $df=5$ であり、帰無仮説が棄却されなかった。

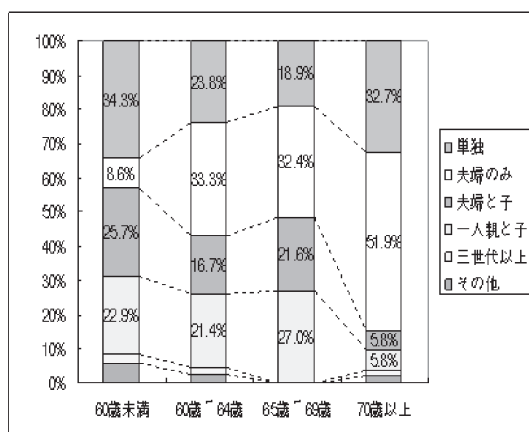


図-7 年齢別の世帯構成 (n=166 60歳未満=35, 60歳～64歳=42, 65歳～69歳=37, 70歳以上=52)
 Fig. 7. Household composition by Age (n=166 Under 60 years=35, 60～64 years=42, 65～69 years=37, Over 70 years=52)

注) 有意水準5%で $\chi^2=30.25$, $p=0.011$, $df=15$ であり, 帰無仮説が棄却された。

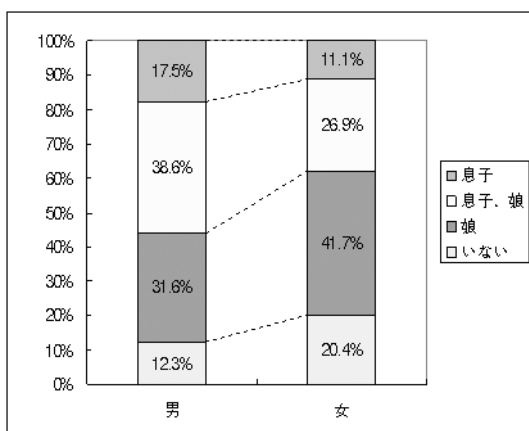


図-8 男女別の子ども (n=165 男=57, 女=108)
 Fig. 8. Children by Gender (n=165 Male=57, Female=108)

注) 有意水準5%で $\chi^2=5.20$, $p=0.0157$, $df=3$ であり, 帰無仮説が棄却された。

満と70歳以上で30%以上と60歳代に比べ高い割合を占めているが, これも図-5の結果から推測すると60歳未満では「未婚」が14.3%, 「既婚(離別)」が11.4%で他の年齢層より高いことが原因として考えられ, また70歳以上では半数以上が「夫婦のみ」の世帯で家族などと同居している世帯が15.4%と少ないことを勘案すると「既婚(死別)」の影響であると思われる。さらに「夫婦と子」, 「一人親と子」の世帯構成は70歳以上ではどちらも5.8%で, 他の年齢層では大体20%前後であり大きな差をみせた。

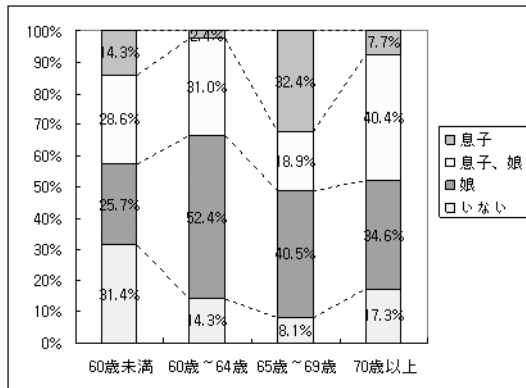


図-9 年齢別の子ども (n=166 60歳未満=35, 60歳～64歳=42, 65歳～69歳=37, 70歳以上=52)
 Fig. 9. Children by Age (n=166 Under 60 years=35, 60～64 years=42, 65～69 years=37, Over 70 years=52)

注) 有意水準5%で $\chi^2=28.39$, $p=0.000$, $df=9$ であり, 帰無仮説が棄却された。

子どもの有無に関する質問では「いる」という回答が82.5%、「いない」が17.5%であった。前述した世帯構成に関する結果で「単独」及び「夫婦のみ」の世帯を合わせ60%以上であったことからみると子どもと同居していない人が多いことがわかる。また「いる」との回答の内訳をみると「息子」のみの場合が13.3%、「娘」のみの場合が38.6%、「息子と娘」両方がいる場合は30.7%であり、「娘」のみいる人が多いことが分かる (n=166)。さらに男女別でみると男性の場合「息子」のみが17.5%、「息子と娘」が38.6%で、女性の場合「息子」のみが11.1%、「息子と娘」が28.9%であり男性が女性より息子が居る場合が18.1%も高い (図-8)。なお、男女別での帰無仮説をカイ二乗検定したところ有意差がみられた。一方で女性の場合は「娘」のみが41.7%と一番高く、「いない」の20.4%を合わせると62.1%にも及び年齢層では一番墓の継承の問題にかかわる息子がいない人が多いことがわかる。特に「娘」のみの回答が多いのは、娘は結婚し、夫の家に入り墓を継承できなくなる場合があるので、子供のいない場合と同様考えることができ、女性の場合は継承者を必要としない樹木葬が希望されていると推測できる。さらに年齢層で差がないとのカイ二乗検定では有意差がみられ、一番差が大きかったのは「息子」のみの場合であり、60歳未満で14.3%、60歳～64歳で2.4%、65歳～69歳で32.4%、70歳以上で7.7%であった (図-9)。また「娘」のみの場合は60歳～64歳で52.4%で他の年齢層に比べても多く、「いない」の14.3%と合わせると66.7%にも及び年齢層では一番墓の継承の問題と関わると思われ、図-2の結果のようにこの年齢層で樹木葬会員が一番多い。さらに前述した「息子」のみの場合65歳～69歳で32.4%と一番多く、樹木葬会員も二番目に多かったことから考えるとこの年齢層では墓の継承の負担をかけたくない人が多いのではなかろうか。なおこの年齢層でも「娘」のみも40.5%で60歳～64歳に続いて高く、60歳代の樹木葬会員が合わせて47.6%で半数を占めており、樹木葬会員は60歳代の「娘」のみのいる人が多いと考えられる。

居住地に関する問いでは天徳寺の所在地である「千葉県」が60.2%で一番高く、次に「東京都」が19.9%、「神奈川県」が7.2%、「埼玉県」が6.6%、「茨城県」が3.0%、「その他」が3.0%

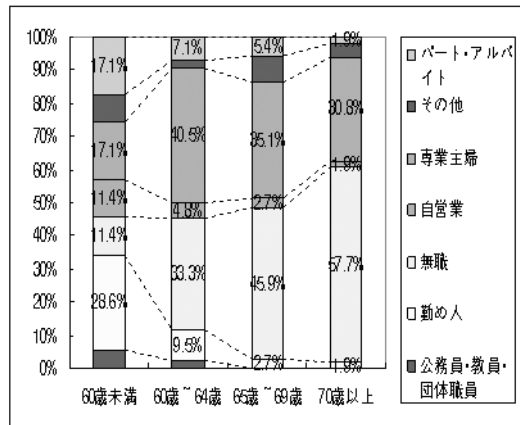


図-10 年齢別の職業 (n=165 60歳未満=35, 60歳～64歳=42, 65歳～69歳=37, 70歳以上=52)
 Fig. 10. Occupation by Age (n=165 Under 60 years=35, 60～64 years=42, 65～69 years=37, Over 70 years=52)

注) 有意水準5%で $\chi^2=51.86$, $p=0.000$, $df=18$ であり, 帰無仮説が棄却された。

の順であった (n=166)。また男女別 (n=162 男=57, 女=105) と年齢別 (n=163 60歳未満=34, 60歳～64歳=41, 65歳～69歳=37, 70歳以上=51) での居住地に差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したところ帰無仮説は棄却されず, 有意差はみられなかった。

職業に関する質問では「無職」が39.4%で一番高く, 次に「専業主婦」が31.5%で高かった (n=165)。また男女別 (n=164 男=57, 女=107) の職業に差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したところ有意水準5%で $\chi^2=53.13$, $p=0.000$, $df=6$ であり, 帰無仮説が棄却された。特に「無職」と「専業主婦」で差が大きく男性の場合は「無職」が71.9%で圧倒的に高く, 女性は22.4%であった。そして女性の場合「専業主婦」が46.7%で一番高く, 男性は1.8%であった。しかし女性の場合は「専業主婦」と「無職」の回答を合わせると69.1%にもなり, 男女共に職についていない人が多いことがわかる。さらに年齢別での帰無仮説をカイ二乗検定したところ, 帰無仮説が棄却された (図-10)。一番差が大きかったのは「無職」であり, 60歳未満では11.4%で70歳以上では57.7%であった。高齢層になるにつれ「無職」や「専業主婦」のように職についていない人が多くなり, これは日本の代表的な定年退職が60歳であることから説明できるだろう。

4-2 樹木葬会員の樹木葬に対する意識

本節では樹木葬会員が樹木葬についてどのような認識をもっているのか, どう評価しているのかを明らかにするために以下の分析を行う。

まず樹木葬を選択した理由に関する質問では多く選ばれた上位5位までの回答をみると1位が「自然に還りたい」, 2位が「継承者がいなくてもいい」, 3位が「樹木葬の趣旨が気に入った」, 4位が「宗教や宗派が関係ない」, 5位が「木を植え里山再生に貢献できる」であった (図-11)。1位の「自然に還りたい」という回答は近年の葬送にみられる自然志向の強さを表してい

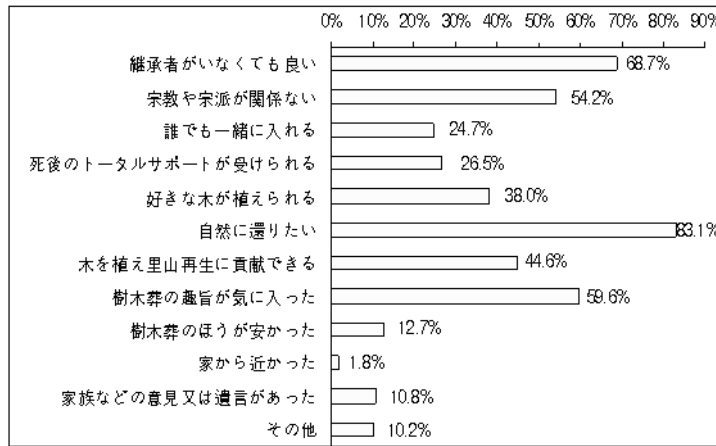


図-11 樹木葬を選んだ理由 (複数回答 n=165)

Fig. 11. Selected Reasons for Afforested Burial (Multiple answers n=165)

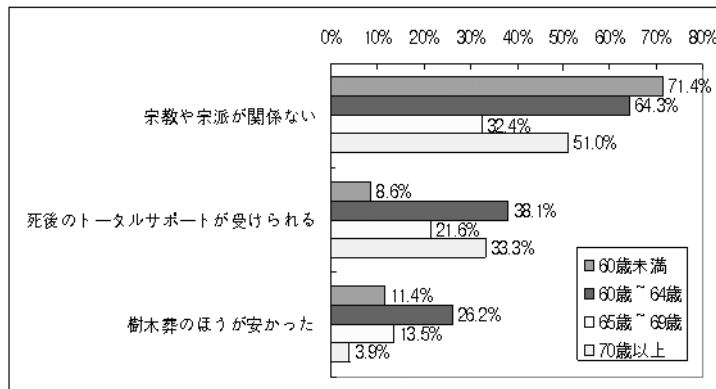


図-12 年齢別の樹木葬を選んだ理由 (複数回答 n=165 60歳未満=35, 60歳~64歳=42, 65歳~69歳=37, 70歳以上=51)

Fig. 12. Selected Reasons for Afforested Burial by Age (Multiple answers n=165 Under 60 years=35, 60~64 years=42, 65~69 years=37, Over 70 years=51)

注) 有意水準5%で「宗教や宗派が関係ない」は $\chi^2=13.18$, $p=0.004$, $df=3$, 「死後のトータルサポートが受けられる」は $\chi^2=10.30$, $p=0.016$, $df=3$, 「樹木葬のほうが安かった」は $\chi^2=10.02$, $p=0.018$, $df=3$ であり, 帰無仮説が棄却された。他の選択肢においては $df=3$, $p>0.05$ であり, 帰無仮説が棄却されなかった。

て, 樹木葬は自然に還られる葬送として認識が高いと読み取れる。この結果は井上の調査結果とも同じである。また2位と4位の回答は従来の墓地慣習における継承の義務や宗教・宗派的制限を避ける最近の葬送の傾向を表している。これは本稿の1. はじめにで記述した森(1998)の調査での結果とも一致する。なお3, 5位の回答は従来の墓地との比較の結果ではなく樹木葬の直接的評価になっているといえよう。

また男女別（複数回答 $n=165$ 男=56, 女=108）でみると多く選ばれた上位5位までの回答は単純集計の結果と同じ傾向が見られ、さらにカイ二乗検定を行なったが、有意水準5%で有意な差は認められなかった。年齢別でみた場合は単純集計と男女別と同じ傾向が見られ、さらにカイ二乗検定を行った結果、三つの回答で帰無仮説が棄却された（図-12）。この三つの回答の内、「宗教や宗派が関係ない」との回答では60歳未満が71.4%で一番選ばれ、65歳～69歳の年齢層では32.4%と一番少ない。年齢層によって宗教や宗派が自由であることが樹木葬を選ぶメリットとして働くかどうかの違いであると考えられるが、特段の理由はわからない。2番目に「死後トータルサポートが受けられる」との回答は60歳未満の年齢層で選ばれた回数が一番少ない。この年齢層は図-7の世帯構成を見ると「単独」が34.3%で一番高い割合を占めているが、図-5の婚姻関係でみると「未婚」が14.3%で「未婚（離別）」が11.4%と他の年齢層に比べ高い割合を占めていることから説明できるだろう。また「夫婦と子」の世帯が他の年齢層に比べ高い割合を占めており、前述した「単独」と「夫婦と子」の世帯が多いことから考えると60歳未満の年齢層が死後のトータルサービスをあまり選んでなかった理由としてはまだ若い年齢層で未婚が多いことや若い核家族が多いことが推測できる。3番目に「樹木葬のほうが安かった」という回答は60歳～64歳で一番多く選ばれ、70歳以上で選ばれた回数が一番少なかった。この結果を年齢別の価格満足度と比べてみると60歳～65歳の年齢層では他の年齢層より「高い」と「なんとも思わない」のやや否定的な回答が多かった（図-13）。これは樹木葬が他の墓地に比べれば安い、樹木葬自体の価格をみるとそうでもないと思う人がこの年齢層には多いことが考えられる。60歳～65歳の年齢層の人が他の年齢層に比べ価格判断はやや厳しいともいえる。一方で70歳以上で「樹木葬のほうが安かった」が少なく選ばれたのは樹木葬の安さがあまり関係ないかそれとも高価と認識していないか判断が分かれる。しかし年齢別の樹木葬墓地の価格に関してみると70歳以上の年齢層では「とても安い」、「安い」、「適当」であるという肯定的な回答が94.2%にも及んでおり、樹木葬の価格が高価と認識していないと判断できる。また70歳以上では他の年齢層で

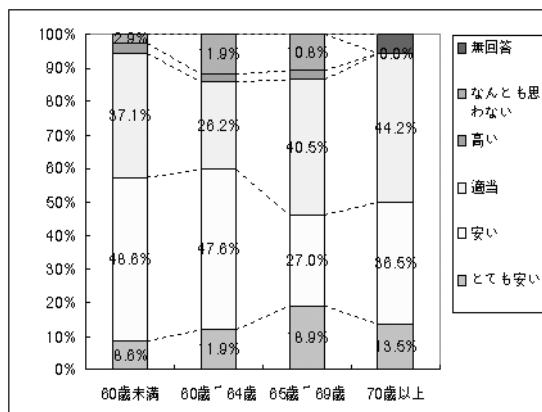


図-13 年齢別の価格満足度 ($n=166$ 60歳未満=35, 60歳～64歳=42, 65歳～69歳=37, 70歳以上=52)
 Fig. 13. Satisfaction by Age ($n=166$ Under 60 years=35, 60～64 years=42, 65～69 years=37, Over 70 years=52)

注) 有意水準5%で $\chi^2=22.18$, $p=0.103$, $df=15$ であり、帰無仮説が棄却されなかった。

はみられなかった無回答が5.8%であり、最後の住処であるから価格の問題でないとの意見や墓地を買ったと思っていないので価格云々は関係ないとの意見があったことから樹木葬の安さが関係ない人もいることがわかる。

樹木葬墓地の価格に関する質問では「とても安い」との回答が13.3%、「安い」が39.8%、「適当」が37.3%であり、合わせると90.4%にも及ぶ（n=163）。したがって多くの樹木葬の会員が樹木葬墓地の価格に関して肯定的に思っていることが分かる。それに樹木葬墓地を購入したことに満足しているかについて聞いたところ「満足」が51.8%、「とても満足」が36.1%、「普通」が9.6%の順に高く、肯定的に思っている人が9割を超えていることがわかる。否定的である「とても不満」との回答は0.6%で、「不満」との回答はなかった（n=163）。さらに樹木葬墓地の価格に対する満足度をクロス集計してみたところ「とても安い」、「安い」、「適当」の順に「とても満足」の比率は下がり、価格に対して肯定的なほど満足度も高いことがわかった（図-14）。しかし、価格が「高い」及び「なんとも思わない」の回答でも「不満」又は「とても不満」はなく、「高い」との回答では「満足」が66.7%で高い割合を占め、「なんとも思わない」では「とても満足」が50%にも及んでいる。また価格別の満足度には差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したところ帰無仮説は棄却された。総じて価格で否定的でない会員は樹木葬墓地の購入にも満足しているが、価格に対して否定的であっても樹木葬購入には満足している人が多く、樹木葬墓地の価格以外の何らかの要因も満足度として評価されていると判断できよう。

樹木葬墓地を購入してよかったところは何かという質問に対して上位3位までの回答をみると1位は「里山の再生・保全に貢献できる」、2位は「木の成長が楽しめる」、3位は「自然とのふれあいの時間が増えた」であった（複数回答 n=161）。また男女別の樹木葬墓地を購入してよかったところをみると男女ともに1位に選ばれたのは「里山の再生・保全に貢献できる」であった。さらに2位の回答は女性は「木の成長が楽しめる」が、男性は「自然とのふれあいの時間が増えた」が選ばれた（図-15）。なお男女別の選択率に違いがないとの帰無仮説をカイ二乗検定した

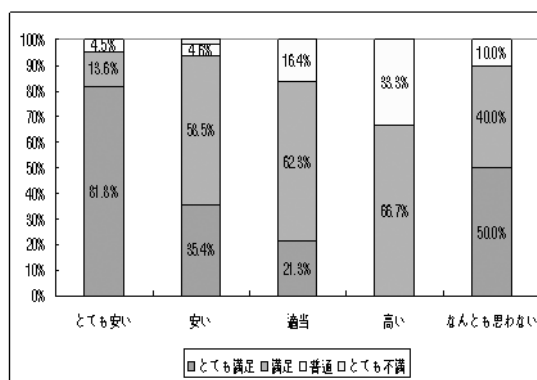


図-14 価格別の満足度 (n=161 「とても安い」=22, 「安い」=65, 「適当」=61, 「高い」=3, 「なんとも思わない」=10)

Fig. 14. Satisfaction by Value (n=161 “Very cheap”=22, “Cheap”=65, “Reasonable”=61, “Expensive”=3, “no opinion”=10)

注) 有意水準5%で $\chi^2=34.20$, $p=0.000$, $df=12$ であり, 帰無仮説が棄却された。

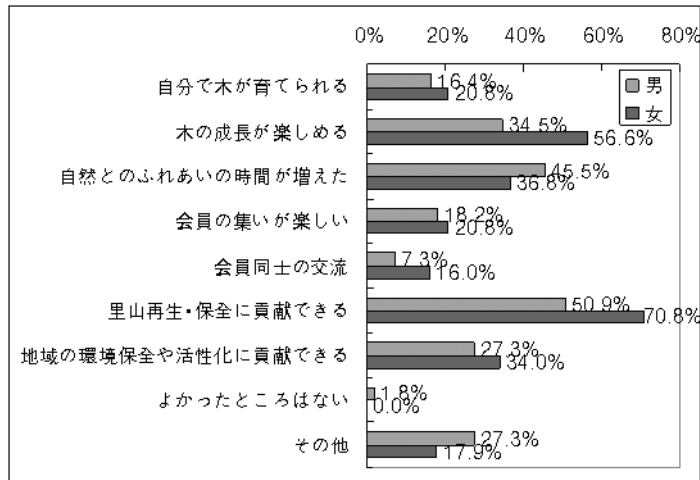


図-15 男女別の樹木葬墓地を購入してよかったところ（複数回答 n=161 男=55, 女=106）
 Fig. 15. Benefits of Acquiring Afforested Burial Grounds by Gender (Multiple answers n=161 Male=55, Female=106)

注) 有意水準 5%で「木の成長が楽しめる」は $\chi^2=7.05$, $p=0.007$, $df=1$, 「里山再生・保全に貢献できる」は $\chi^2=6.18$, $p=0.012$, $df=1$ であり, 帰無仮説は棄却された。他の選択肢においては $df=1$, $p>0.05$ であり, 帰無仮説が棄却されなかった。

が、「木の成長が楽しめる」と「里山の再生・保全に貢献できる」の回答で帰無仮説は棄却され、「木の成長が楽しめる」は約 1.6 倍、「里山の再生・保全に貢献できる」は約 1.3 倍女性のほうが多く選んでいる。しかし、男女別に特別な傾向が見られておらず、特段の理由はないと思われる。さらに年齢別 (n=165 60歳未満=35, 60歳～64歳=42, 65歳～69歳=37, 70歳以上=51) でみると上位3位までの回答は単純集計の結果と大体同じ傾向で選ばれているが、60歳未満の年齢層のみ1位の回答は「木の成長が楽しめる」であった。また「里山再生・保全に貢献できる」の回答は60歳～64歳の選択率が83.3%で他の年齢層では50%～60%の間の選択率を見せたのに対し際立って集中して選ばれている。さらにこの選択肢のみカイ二乗検定で有意水準5%で $\chi^2=10.78$, $df=3$ であり, 帰無仮説は棄却され, 有意差が認められた。しかし年齢層で特徴が見られるわけではないので特段の理由があるとは思われない。総じて選択肢の一部では男女別または年齢別で差が見られたが, 特段の理由はないと思われるが, 一方で60歳～64歳の女性の樹木葬墓地の購入への「里山再生・保全に貢献できる」との評価が高いことがわかる。

樹木葬墓地を購入して不便又は不安なところは何かという質問に対して上位3位までの回答をみると1位は「交通の便が不便」、2位は「不便・不安なところはない」、3位は「墓地内に通路がなく墓を踏んでしまう」であった（複数回答 n=155）。男女別の場合でも同じ傾向が見られ, 選択率に違いがないとの帰無仮説をカイ二乗検定したが, すべての選択肢で棄却されなかった（図-16）。しかし、「交通の便が不便」の選択肢は女性が男性より10.4%も多く選んでおり他の選択肢の男女別の差より大きく, 女性の方が交通の便で不便を感じている人が多いといえる。また「不便・不安なところはない」も男女の差が大きく男性が女性より選択率が11.7%高いので

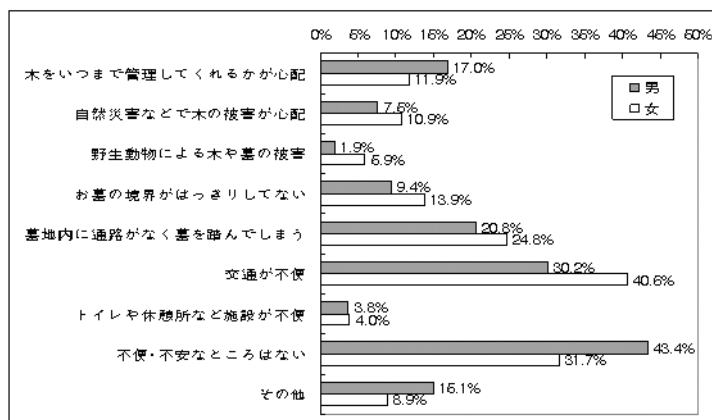


図-16 男女別の樹木葬墓地を購入して不便又は不安なところ（複数回答 n=154 男53, 女=101）
 Fig. 16. Inconvenient or Disquiet points for Acquiring Afforested Burial Grounds by Gender (Multiple answers n=158 Male=54, Female=104)

注) 有意水準5%でカイ二乗検定を行ったところすべての選択肢においてdf=1, $p > 0.05$ であり, 帰無仮説が棄却されなかった。

比較的男性の方が女性より不便さなどは感じない人が多いと思われる。一方で年齢別 (n=155 60歳未満=34, 60歳～64歳=38, 65歳～69歳=36, 70歳以上=47) で選択率には差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したところ「交通が不便」の回答のみ有意水準5%で $\chi^2=9.56$, df=3であり帰無仮説が棄却された。「交通が不便」という回答を一番多く選んだのは60歳～64歳で50%, 70歳以上で44.7%, 60歳未満で29.4%, 65歳～69歳で19.4%の順である。またカイ二乗検定で有意差はみられなかったが, 「木をいつまで管理してくれるか心配」の選択肢でも年齢別に差が大きく70歳以上は21.3%で65歳～69歳は2.8%であり18.5%の差があった。60歳未満及び65歳～69歳が一番多く選んだのは「不便・不安なところはない」で, 60歳～64歳及び70歳以上は「交通の便が不便」である。65歳～69歳は全体的に選択肢の選択率が他の年齢層に比べ少なく, 60歳～64歳と70歳以上は全体的に平均的にどの選択肢も選択率が高い。このように前述した「交通が不便」のカイ二乗検定で帰無仮説が棄却されたのは年齢別での全体的な不便・不安な要素が多いか無いかの差であると考えられる。

樹木葬会員の集いに参加 (n=159) しているかどうかの質問では「参加している」との回答が55.3%で, 「参加していない」は44.7%であり, 参加している人が10.6%多かった。また男女別 (n=158 男=54, 女=104) で参加率には差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したところ有意水準5%で $\chi^2=2.06$, $p=0.150$, df=1であり帰無仮説は棄却されなかったが, 「参加している」の回答が男性の場合63%, 女性の場合は51%であり男性が女性より12%高く, 男性の参加率が高いことがわかる。さらに年齢別 (n=159 60歳未満=35, 60歳～64歳=41, 65歳～69歳=33, 70歳以上=50) の場合, 帰無仮説をカイ二乗検定したところ有意水準5%で $\chi^2=2.98$, $p=0.394$, df=3であり, 有意差は見られなかったが, 60歳未満の年齢層のみ「参加していない」の回答が54.3%で過半数を超え, 他の年齢層では「参加している」の割合が高かった。年齢層が高くなるにつれ参加率が多少高くなる傾向があったが, 70歳以上の年齢層では参加率が減り, 65歳～69

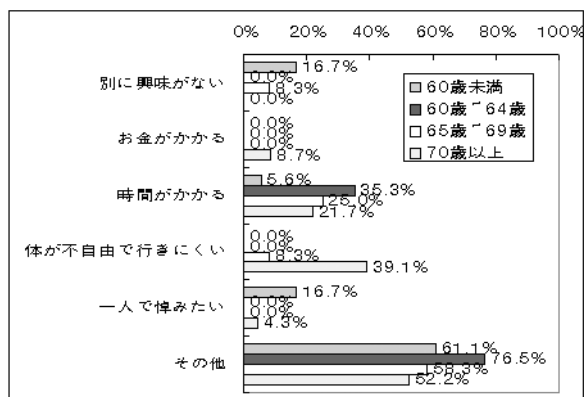


図-17 年齢別の集いに参加しない理由（複数回答 n=70 60未満=18, 60～64歳=17, 65～69歳=12, 70歳以上=23）

Fig. 17. Reasons for Non-participation in Gathering by Age (Multiple answers n=70 Under 60 years=18, 60～64 years=17, 65～69 years=12, Over 70 years=23)

注）有意水準5%で「体が不自由で行きにくい」は $\chi^2=17.77$, $p=0.00$, $df=3$ であり, 帰無仮説は棄却された。その他の選択肢においては $df=3$, $p>0.05$ であり, 帰無仮説が棄却されなかった。

歳で一番高い参加率をみせ63.6%にも及んだ。

さらに樹木葬会員の集いに「参加していない」と答えた人71名に対し参加していない理由について聞いてみた。その結果, 無回答3名を除く68名の内, 「その他」が一番多く選ばれ, 「その他」の理由としては仕事の都合で会員の集いの日にちと合わないということや契約をして間もなくまだ参加する機会がなかったという意見が多数あった。2番目に多かった回答は「時間がかかる」で, 3番目は「体が不自由で行きにくい」であった。また男女別（複数回答 n=70 男=19, 女=51）での選択率に関してカイ二乗検定を行ったが, 有意水準5%ですべての選択肢において, 帰無仮説が棄却されなかった。しかし, 男女共に「その他」が一番多く選ばれており, また女性は66.7%にも及んでおり, 前述したように樹木葬会員の集いに参加しない理由は参加したくないという意見があるのではなく何らかの事情により参加できない状況にいる人が多いと推測できる。さらに年齢別でみてみると「体が不自由で行きにくい」との選択肢のみカイ二乗検定で帰無仮説は棄却された（図-17）。この回答では70歳以上での選択率は39.1%, 65歳～69歳は8.3%, その他の年齢層では0%であり, 70歳以上という高齢であることが理由として妥当であろう。

総じて集いへの参加と参加しない理由に関する問いの結果をあわせて考えると, 樹木葬会員集いへの参加率が男女別では男性が, 年齢層では65歳～69歳で高いが, この結果は前述の樹木葬墓地を購入して不便不安なところは何かという質問で, 「交通が不便」という回答において女性が高い割合を占めたことと, 65歳～69歳で一番低い割合を見せたことから交通の便と関係しているのではないと思われる。また参加しない理由としては男女別では差はないが「その他」が多く選ばれ, 「その他」では契約して間もなく, もしくは仕事の都合と合わなく参加する機会がなかったとの意見が多く, 参加の意向は持っている人も多いことがわかった。

樹木葬会員の集いに「参加している」と答えた人88名に対し集いに参加してよかった点について聞いたところ無回答の2人を除く86人の内, 「樹木葬会員同志で交流が出来る」との回答を

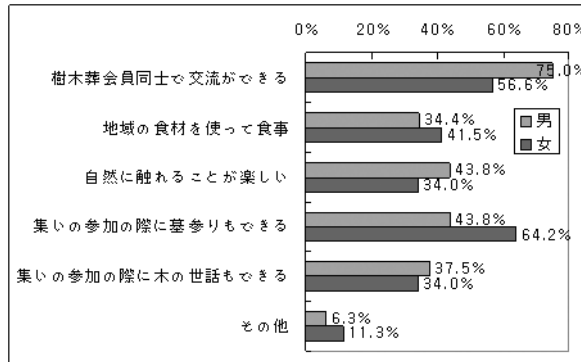


図-18 男女別の集いに参加してよかったところ (複数回答 n=85 男=32, 女=53)
 Fig. 18. Benefits of Participation in Gathering by Gender (Multiple answers n=85 Male=32, Female=53)

注) 有意水準5%ですべての選択肢においてdf=1, p>0.05であり, 帰無仮説が棄却されなかった。

選んだ人が64%であり, 一番多かった(複数回答 n=86)。2番目は「集いの参加の際に墓参りも出来る」が, 3番目は「自然に触れることが楽しい」及び「地域の食材を使って食事をする」が同数で選ばれた。また男女別の場合一番多く選ばれたのは女性の場合「集いの参加の際に墓参りも出来る」で, 男性の場合「樹木葬会員同志で交流が出来る」であった。二番目に多く選ばれたのは女性の場合は「樹木葬会員同志で交流が出来る」で, 男性の場合は「集いの参加の際に墓参りも出来る」及び「自然に触れることが楽しい」であった(図-18)。さらにカイ二乗検定では男女別で選択率での違いが有意とはならなかったが, 男性の場合は集いの参加を通して会員同士の交流が出来るところに集いの良さを感じ, 女性の場合は会員の集いそのものよりは副次的なメリットとして墓参りが出来ることに良さを感じていることがわかった。一方で年齢別(n=86 60歳未満=16, 60歳~64歳=25, 65歳~69歳=20, 70歳以上=25)での有意水準5%でのカイ二乗検定では年齢別での選択率で違いが有意とはならなかったが, 60歳未満と60歳~64歳では「集いの参加の際に墓参りも出来る」の回答が一番多く選ばれ, 65歳~69歳と70歳以上では「樹木葬会員同志で交流が出来る」との回答が一番多く選ばれ, 65歳未満と65歳以上の年齢層で違いがあり, 低年齢ほど副次的なメリットが, 高年齢ほど交流に良さを感じていることがわかる。

年間の天徳寺への訪問回数に関する質問では「1~2回」という回答が53.3%で一番高く, 次に「3~4回」が25.7%, 「その他」9.9%の順に高かった。森(1998)の調査でも墓参りの頻度について調査しており, 年に1~2回が36.6%, 3~4回が35.4%であった。天徳寺では樹木葬会員の集いも行っているので一般の墓参りの頻度よりは多いと予想したが年に1~2回という答えが過半数以上で多かったものの年に3~4回までの回答を合わせると一般の墓参りに比べけっして多いとはいえない。しかし「その他」の回答では契約して間もないからまだ行く機会がなかったという意見も多数見られ, 今後樹木葬墓地を訪れる回数は増えると思われる。男女別(n=151 男=52, 女=99)での年間訪問数では男女共に同じ傾向を見せ, 男女別での訪問率に違いがないとの帰無仮説は有意水準5%で $\chi^2=3.61$, $p=0.306$, $df=3$ であり, 棄却されなかった。しかし男性の場合「1~2回」との回答が63.5%, 女性は47.5%であり, 男性の方が女性に比べ高

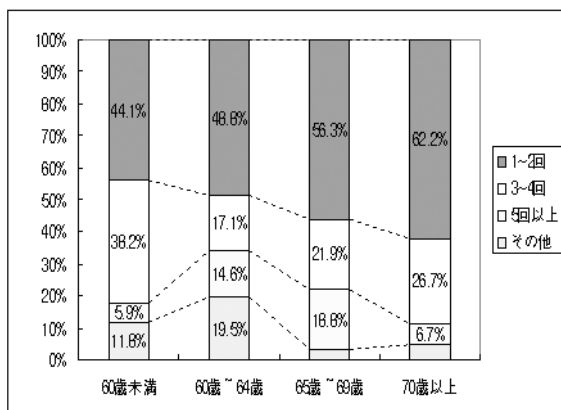


図-19 年齢別の年間訪問回数 (n=152 60未満=34, 60～64歳=41, 65～69歳=32, 70歳以上=45)
 Fig. 19. Frequency of Visits in One year by Age (n=152 Under 60 years=34, 60～64 years=41, 65～69 years=32, Over 70 years=45)

注) 有意水準5%で $\chi^2=15.44$, $p=0.079$, $df=9$ であり, 帰無仮説が棄却されなかった。

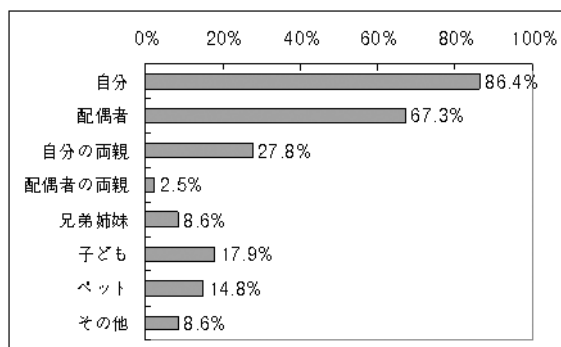


図-20 樹木葬の対象 (n=162)
 Fig. 20. Object of Afforested Burial (n=162)

い割合を占めており, その他の選択肢の回答率ではすべて女性の方が男性より多く, 全体的な訪問回数は女性が平均的に多いといえる。さらに年齢別での選択率の帰無仮説もカイ二乗検定したところ有意差は見られなかったが, 「1～2回」との回答は年齢層が高くなるにつれ, 高い割合を占める傾向がみられた (図-19)。また60歳～64歳では「その他」が19.5%で2番目に高い割合を占めており, 他の年齢層に比べて多く違う傾向を見せているが, この年齢層で契約したばかりの人が多くのではないかと推測できる。

樹木葬墓地を契約したのは誰のためなのかの質問に関して, 上位3位までの答えを見ると1位が「自分」用であるとの回答で, 2位が「配偶者」, 3位が「自分の両親」であった。一番選ばれなかった選択肢は「配偶者の両親」であった (図-20)。1, 2位については井上の調査と同じ

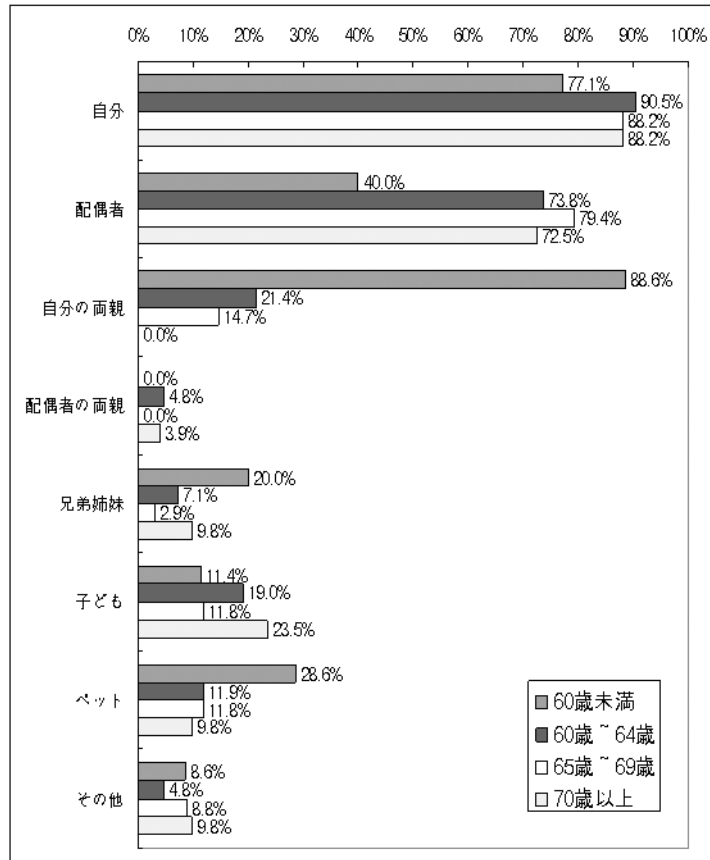


図-21 年齢別の樹木葬の対象（複数回答 n=162 60未満=35, 60～64歳=42, 65～69歳=34, 70歳以上=51）

Fig. 21. Object of Afforested Burial by Age (Multiple answers n=162 Under 60 years=35, 60～64 years=42, 65～69 years=34, Over 70 years=51)

注) 有意水準5%で「配偶者」は $\chi^2=15.56$, $p=0.001$, $df=3$ で, 「自分の両親」は $\chi^2=87.83$, $p=0.000$, $df=3$ で, 二つの回答の場合は帰無仮説は棄却された。他の選択肢においては $df=3$, $p>0.05$ であり, 帰無仮説が棄却されなかった。

であり, 井上 (2003) の調査では3位は「子ども」であった。また森 (1998) の調査では「お墓にだれと一緒に入りたいか」という設問を設けており, 回答結果は配偶者, 子ども, 先祖代々の順に多く, 樹木葬会員への調査ではあまり選択されなかった先祖代々という回答も多かったということがわかり, 一般的な墓地に対する考えと樹木葬とは差があると言え, 井上のいう「脱継承」という傾向も表している。

男女別の場合 (n=161 男=55, 女=106) は男女ともに単純集計と同じ傾向であった。男女別に選択率に差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したが, 有意水準5%ですべての選択肢において, 帰無仮説は棄却されなかった。しかし女性の場合「自分の両親」及び「子ども」を選択した人が男性より多く, 「ペット」は女性のほうが約2.5倍も選択している。男性の場合は「自分」と

「配偶者」の選択肢に集中している傾向をみせた。これは女性の方が男性より樹木葬の対象が多様であり、男性の場合は夫婦で樹木葬墓地に入る場合が多いと思われる。

年齢別の場合は年齢層によって違いがみられ、特に60歳未満の場合が特徴的である(図-21)。60歳未満以外の年齢層では「自分」の回答が一番多く選択されたが、60歳未満では「自分の両親」が他の年齢層に比べ約4.9倍も選ばれ一番多く、2番目に「自分」が多かった。また「配偶者」の回答は60歳未満以外の年齢層で2番目に多く選ばれており、60歳未満では3番目に選ばれた回答であるが他の年齢層に比べ1.8倍少ない。そして年齢別の選択率に差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したところ「配偶者」及び「自分の両親」の回答では有意差がみられた。これは図-5でわかるように60歳未満はもともと配偶者のいない率が60%と高く、樹木葬の対象に自分と自分の両親を考えていることが説明できるだろう。また他の年齢層でも配偶者のいない率が45.9%~41.2%で過半数に近く、これらの60歳未満以外の年齢層では「配偶者」が2番目にたくさん選ばれたこととあわせて考えるとすでに配偶者と死別をした人が多いのではないかと推察される。70歳以上では「自分の両親」は選ばれなく、この年齢層はすでに高齢であるので自分の両親がすでに他界した場合が多いと考えられる。またカイ二乗検定では有意な差が見られなかったが、60歳未満では他の年齢層に比べ、「兄弟姉妹」及び「ペット」が多く選ばれている。

樹木葬用に植樹した木と魂との関係についての質問では、樹木に魂が「宿ると信じたい」と「宿るとは思わない」の回答が同じく40.1%であった。また「宿ると信じる」は3.8%であり、樹木と魂との関係が必ずしも一体化するものであるという考えではないことが確認できる。また男女別で見ると男性の場合は「宿るとは思わない」が52.9%で、次に「宿ると信じたい」が25.5%、「よくわからない」が19.6%の順に高かった(図-22)。女性の場合は「宿ると信じたい」が46.7%で、次に「宿るとは思わない」34.3%、「よくわからない」が14.3%の順で高く、樹木に対する考えは女性の方が男性より魂との関係を信じようとする傾向が強いということがわかる。男性は樹木と魂の関係に関しては否定的である。そして男女別に選択率に差がないとの帰無仮説のカイ二乗検定でも有意な差が見られた。前述した図-15での結果で女性の方が「木の成長が楽しめる」との回答を多く選んでおり、この結果と総じて考えると女性の方が男性より樹木に対し何らかの

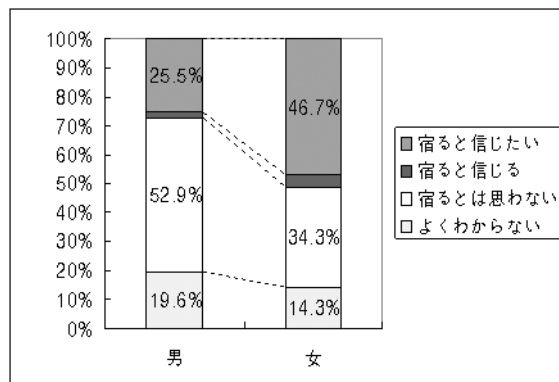


図-22 男女別の樹木に対する考え (n=156 男=51, 女=105)

Fig. 22. Impression About Trees by Gender (n=156 Male=51, Female=105)

注) 有意水準5%で $\chi^2=8.13$, $p=0.043$, $df=3$ であり, 帰無仮説が棄却された。

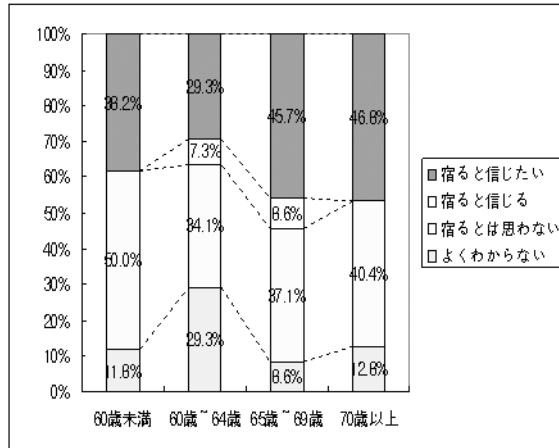


図-23 年齢別の樹木に対する考え (n=157 60歳未満=34, 60～64歳=41, 65～69歳=35, 70歳以上=47)
 Fig. 23. Impression About Trees by Age (n=157 Under 60 years=34, 60～64 years=41, 65～69 years=35, Over 70 years=47)

注) 有意水準5%で $\chi^2=16.20$, $p=0.062$, $df=9$ であり, 帰無仮説が棄却されなかった。

意味づけをしているといえる。さらに年齢別の場合には選択率に差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したが帰無仮説が棄却されず, 有意な差はみられなかったものの60歳未満では「宿るとは思わない」が過半数に及んでおり, 他の年齢層に比べ約10%以上高い割合を占めている(図-23)。また60歳～64歳では「宿ると信じたい」の回答が29.3%で「宿るとは思わない」は34.1%であり, 他の年齢層より低いが, 「よく分からない」は29.3%で他の年齢層に比べ約2倍以上も高い。60歳～64歳は他の年齢層に比べ樹木と魂の関係についてはこだわらないと考えられる。加えて自分や配偶者が樹木葬の対象である場合のほうが魂と樹木の間を信じる傾向があると予想し, 樹木葬を契約したのは誰のためであるかという樹木葬対象別に魂と樹木の間をクロス集計した。その結果, 特徴的なものはなかったが, 「自分」の場合より「配偶者」の場合が「宿ると信じる」が他の答えより平均的に約15%高かった。また樹木葬の対象が「自分の両親」の回答では「宿るとは思わない」が50%で高く, 「よく分からない」及び「宿ると信じたい」が16%くらいで, 「宿ると信じる」は0%であり, 有意水準5%で $\chi^2=22.44$, $p=0.000$, $df=3$ であり有意差が認められた。

4-3 樹木葬会員の樹木葬墓地による里山保全に対する意識

本節では樹木葬の会員は樹木葬墓地の経営・管理側が目的としている里山保全という課題に対してどのくらい賛同し, どういった評価をしているのかを明らかにするために以下の結果の分析を行なう。

まず樹木葬の会員は樹木葬墓地が里山保全に貢献できると考えているかどうかについて聞いてみたところ「貢献できる」との回答が79.6%で一番高く, 次に「よく分からない」が19.8%, 「貢献できない」が0.6%であり, 樹木葬会員の約4分の3以上の人は樹木葬墓地が里山保全へ貢献していると考えていることが分かる(図-24)。また男女別及び年齢別での帰無仮説をカイ二乗

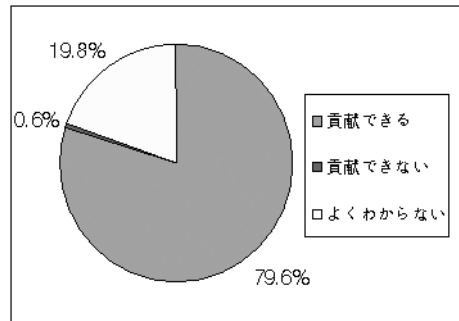


図-24 樹木葬墓地の里山保全への貢献 (n=162)
Fig. 24. Contribution to the Conservation of Satoyama by Afforested Burial Grounds (n=162)

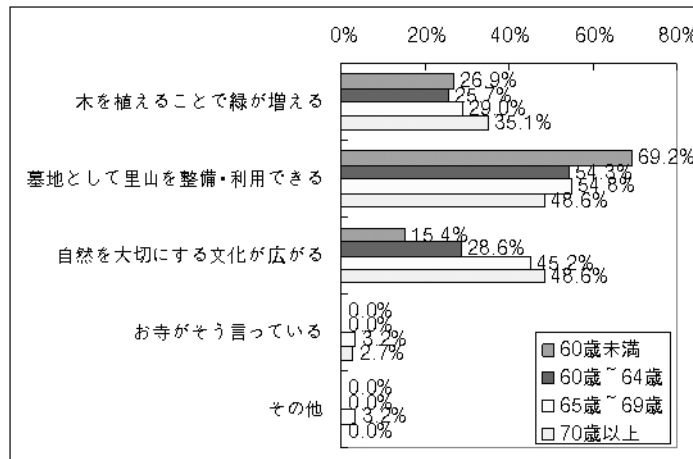


図-25 年齢別の里山保全に貢献できると思う理由 (n=130 60未満=26, 60~64歳=35, 65~69歳=31, 70歳以上=38)

Fig. 25. Reasons for the Contribution to Conservation of Satoyama by Age (n=130 Under 60 years=26, 60~64 years=35, 65~69 years=31, Over 70 years=38)

注) 有意水準5%で「自然を大切にする文化が広がる」は $\chi^2=8.94$, $p=0.030$, $df=3$ であり帰無仮説は棄却された。他の選択肢においては $df=3$, $p>0.05$ であり, 帰無仮説が棄却されなかった。

検定したところ, 棄却されなかったので男女別でも年齢別でも樹木葬墓地の里山保全への貢献については同様に評価していると判断できる。

さらに上記の質問で「貢献できる」と回答した129名に対し貢献できると思う理由について聞いたところ一番多く選ばれた回答は「墓地として里山を整備・利用できる」で, 2番目に「自然を大切にする文化が広がる」が, 3番目に「木を植えることで緑が増える」が選ばれた(複数回答 n=129)。また男女別でカイ二乗検定をしたところ有意水準5%ですべての選択肢において帰無仮説は棄却されなかった。さらに年齢別でのカイ二乗検定では「自然を大切にする文化が広が

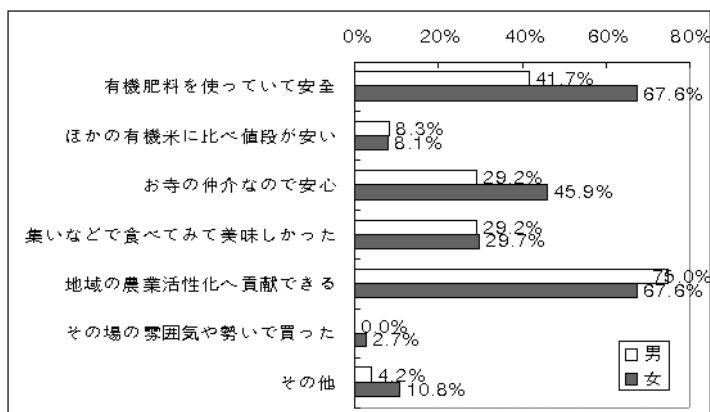


図-26 男女別の米の購入理由（複数回答 n=61 男性=24, 女性=37）

Fig. 26. Reasons for the Purchase of Rice by Gender (Multiple answers n=61 male=24, female=37)
 注) 有意水準5%で「有機肥料を使っていて安全」は $\chi^2=3.99$, $p=0.045$, $df=1$ であり帰無仮説は棄却された。他の選択肢においては $df=1$, $p>0.05$ であり, 帰無仮説が棄却されなかった。

る」の回答で帰無仮説が棄却された（図-25）。「自然を大切にする文化が広がる」の回答は年齢層が高くなるにつれ多く選ばれており、一番多く選んだ70歳以上と一番少なく選んだ60歳未満とは約3.1倍の差がある（図-25）。なおカイ二乗検定で有意差は見られなかったが「墓地として里山を整備・利用できる」の回答では60歳未満で一番多く選択され、70歳以上で一番少なく選択された。この二つの選択肢の選択率の比較及び60歳未満では選択肢別での選択率の差が大きく、60歳～64歳でも60歳未満ほどではないが選択率に差があり、60歳未満と同じ傾向を見せている。これらのことから考えると樹木葬墓地が里山保全に貢献できる理由として若年齢層では里山が樹木葬墓地として整備・利用されるといった実践的な面を選んでいるといえる。また高齢層では若年齢層に比べ選択肢間の選択率に差は小さく、「墓地として里山を整備・利用できる」及び「自然を大切にする文化が広がる」の回答がほぼ同数で選ばれており、実践的な面と精神的な面の両方を同じく里山保全の貢献として挙げていることがわかる。

天徳寺で販売している米を購入（n=159）したことがあるかについて聞いたところ「はい」の回答が37.3%、「いいえ」が58.4%で、購入したことがない人が21.1%多かった。また男女別（n=158 男性=55, 女性=103）に米購入には差がないとの帰無仮説のカイ二乗検定を行い有意水準5%で有意な差は認められなかったが、男性の購入者が43.6%で女性の35.9%より7.7%高かった。年齢別（n=159 60歳未満=35, 60歳～64歳=40, 65歳～69歳=34, 70歳以上=50）では65歳～69歳では購入したことがある人が44.1%で他の年齢層の37%～38%であったのに対し多かったが、帰無仮説をカイ二乗検定したところ有意水準5%で年齢別の米購入率には有意差が認められなかった。

さらに米を購入したと回答した62名に米を購入した理由について聞いてみたところ「地域の農業活性化に貢献できる」との答えが一番多く選ばれ、2番目に「有機肥料を使っていて安全」が、3番目に「お寺の仲介なので安心」が選ばれた（複数回答 n=62）。このように上位3番目までの回答をみると米の付加価値を評価していることがわかる。また男女別での選択率に差がない

との帰無仮説をカイ二乗検定したところ「有機肥料を使っている安心」といった選択肢のみ棄却された(図-26)。また有意差は見られなかったが「お寺の仲介なので安心」の回答でも女性の方が男性より約1.5倍多く選んでおり、「有機肥料を使っている安心」の回答と合わせて考えると女性の方が食の安全、安心という面を比較的重視していると思われる。一方で「その他」の選択肢は女性の方が男性より2.5倍多く、「米が重くて持っていきが大変だから買えない」及び「一人暮らしなのでたくさん食べれなく小分けして売ってほしい」との意見が多少あったことから女性の中では米を買いたい意志はあるが何らかの理由で買えない人もいることがわかる。そして年齢別のカイ二乗検定では有意水準5%の場合、すべての選択肢において帰無仮説は棄却されなかった。さらに「その他」の意見から世帯構成が米の購入と関連があると予想し、クロス集計してみたところ「夫婦のみ」の世帯が50.9%で一番多く、次に「夫婦と子」の世帯が44%であった。従って世帯構成員が多いほど米を買う傾向は見られなかった。また世帯構成別(n=159 夫婦と子=25, 夫婦のみ=53, 三世代以上=3, 一人親と子=28, 単独=46, その他=4)の米の購入率に差がないとの帰無仮説をカイ二乗検定したところ有意水準5%で $\chi^2=8.689$, $p=0.122$, $df=5$ であり、有意差は認められなかった。米の購入と世帯構成を総じて考えると米の購入は男性が女性より多かったことや図-6で「夫婦のみ」の世帯は男性が45.6%と多かったことから米の購入者は男性で夫婦のみの世帯の人が多くと推測できる。

4-4 樹木葬会員の地域経済への影響

本節では樹木葬会員が地域の経済にどのくらい影響を与えているかを明らかにするために墓参りなどでの経費及び訪問先、購入品について分析を行なう。

まず樹木葬の集いや墓参りなどで天徳寺を訪れる際、1回あたりどのくらい費用をかけているのか支出額を聞いてみた。その結果、「1万円未満」の回答は52.6%で一番高く、次に「1万円～3万円未満」が36.1%、「3万円～5万円未満」が6.8%の順であった(図-27)。「1万円未満」及び「1万円～3万円未満」を合わせると88.7%にも及んでおり、1回あたりの支出額に交通費が含まれていると考えると地域の経済へ直接与える影響が大きいとは言いがたいだろう。また男女別(n=132 男性=51, 女性=81)にクロス集計を行いカイ二乗検定したところ有意水準5%で有

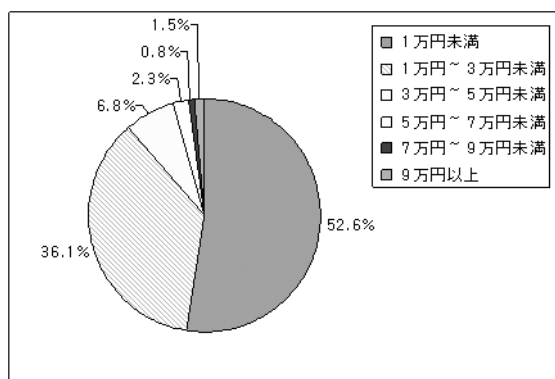


図-27 支出費 (n=133)
Fig. 27. Expenditure (n=133)

意差は認められなかった。さらに年齢別（n=133 60歳未満=26, 60歳～64歳=36, 65歳～69歳=32, 70歳以上=39）でも有意水準5%で、有意差は認められなかった。一方で仮に各支出費回答幅の中央値（9万円以上については9万円）を用いて年齢別での平均支出費を出してみたところ60歳未満は12,700円、60歳～64歳は16,800円、65歳～69歳は16,900円、70歳以上は16,300円と60歳未満が相対的に低い値となった。

樹木葬の集いや墓参りなどで天徳寺を訪れる際に天徳寺で販売している米以外に大原地域で何か購入した物はあるか聞いてみた。その結果、何かを購入したと回答した人は51人であり、樹木葬会員の約1/3の人のみ大原地域で消費活動を行っていることがわかった。そして購入した品を自由回答で書いてもらい、分類を行ったところ「海産物」が47.3%で一番多く、次に「その他」が18.2%、「農産物」が16.4%、「農産物・海産物」は10.9%、最後に「農産物・その他」7.3%の順に多かった（図-28）。即ち海産物>農産物>その他の順であることがわかる。詳細には海産物は魚類が多く、農産物は野菜類が、その他にはピーナッツとの回答が多かったので、生

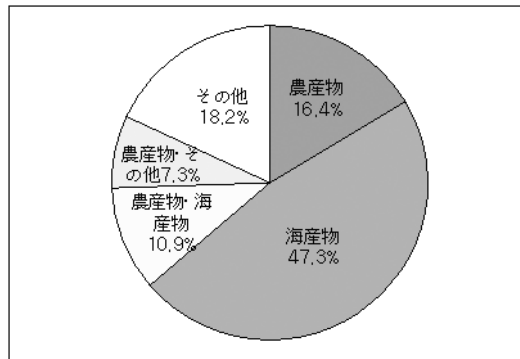


図-28 大原地域での購入品 (n=55)
Fig. 28. Purchase of Goods in Oohara region

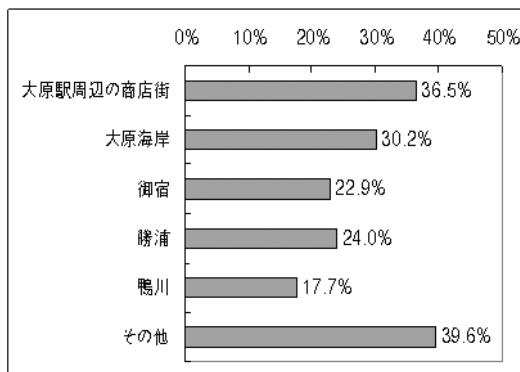


図-29 寄るところ (複数回答 n=96)
Fig. 29. Other places visited when attending the temple (Multiple answers n=96)

ものが多いことがわかる。

樹木葬の集いや墓参りなどで天徳寺を訪れるときに天徳寺以外に寄るところがあるかについての問いに対しては寄るところがあると回答した人は96人で、寄らないと回答した人は28人で、無回答が42人であった。また寄るところについては「その他」が39.6%で一番多く選ばれた。2番目は「大原駅周辺の商店街」で、3番目に「大原海岸」、4番目は「勝浦」、5番目に「御宿」、6番目に「鴨川」の順で多く選ばれた。樹木葬の集いなどに参加する際は大体大原周辺に寄る事が多いことがわかる(図-29)。「その他」の詳細はわからないが、大体大原駅周辺から遠くなるほど立ち寄らないことがわかる。また勝浦、御宿、鴨川のような観光地にも寄る人が多少あるのでこれから樹木葬会員が増えることで大原周辺の地域への経済効果も出てくるのではないかと思われる。

5. まとめと考察

以下では本稿の4. 調査結果と分析で述べてきた樹木葬会員の属性の特徴、樹木葬に対する評価、里山保全への認識や地域経済への影響についてまとめる。そのうえ本稿の課題である樹木葬墓地による持続可能な里山保全、地域活性化への効果を高めるための課題についての考察を行なうことにする。

最初に樹木葬の会員の属性の特徴についてまとめる。

樹木葬会員の年齢別の男女比率は若齢層では女性の割合が圧倒的に高く、高齢層になるにつれ女性と男性の割合の差が小さくなったが、総じて60代の女性の関与が多い。本稿の4-1で述べた日本の平均寿命に比べると約20年~25年も早くから墓地を購入する人が多いといえるが、一方で高齢層での女性の墓地購入決定権が弱いことがわかった。世帯構成では夫婦のみの世帯が多いが、男女別でみると男性は夫婦のみの世帯が、女性は単独世帯が一番多かった。年齢別では60歳未満と70歳以上で単独世帯が多く、特に70歳以上では夫婦のみの世帯が過半数を超える。また60歳代での娘のみいる人が多いが、特に女性の場合、娘のみいる場合と子どもがいない場合をあわせて6割を超え、墓の継承に関わる人が多いことがわかった。さらに子どもはいるが別居している人が多かった。職業に関しては樹木葬の会員は定年を超える年齢層の人が多く、男女ともに職についていない人が多かった。

一方で居住地は天徳寺の所在地である千葉県が60.2%で一番高く次に東京都が19.9%であり同一県内の人が多い。居住地が千葉県が多いのは墓の購入の際、距離を重視する傾向があることが既に明らかになったが、樹木葬を選んだ理由としては「家から近かった」という選択肢があまり選ばれておらず、家から墓地までの距離を墓地選定理由に反映していないわけではないが、絶対条件ではなかったと考えられる。なお樹木葬墓地を購入後に不便・不安なところに関しては交通の不便が一番多く選ばれ、特に女性が多く選んでいる。墓地の購入要件として家から墓地までの距離と伴い交通の便も重要であると考えられる会員が多いことがわかった。こういった近年墓地の購入に交通の便という条件は大いに影響があると考えられ、例えば「平成17年度都政モニター調査」の結果でも墓を求める条件で一番重視するのは「霊園へのアクセス」であった²³⁾。

次に樹木葬に対する評価、里山保全への認識や地域経済への影響についてまとめ、考察を加える。

樹木葬墓地を購入したことに関しては8割以上の人が満足しており、購入後に良かったと思う

点は里山保全や再生に貢献できるとの理由が最も多く選択された。これは樹木葬を選んだ理由で里山再生が5位であったことから考えると、樹木葬墓地の購入時での自然に還りたいという自然への憧れがあったものが、具体的な樹木葬墓地に直面することにより里山保全をより認識するようになったのではないだろうか。樹木葬会員は従来の墓地システムである墓石建立や継承の問題から自由になりたい人であり、最初から里山保全の意識をもって樹木葬墓地の契約を行うということは起こりにくい。しかし樹木葬会員は樹木葬墓地の購入後には樹木葬墓地を経営・管理していくことが里山保全にもつながるといったことを意識し始め、本稿の1. で述べたように里山保全のための持続的な管理への理解者になり、樹木葬会員が増えれば里山保全への理解者も増えると考えられる。このことは樹木葬墓地が里山保全に貢献できると思う理由の回答でも伺える。その理由としては墓地として里山を整備・利用できるからという選択肢が一番多く選ばれ、里山を樹木葬墓地にすることに意義があると思う人が多いと思われる。ただし、現状では樹木葬会員は里山保全への消極的な参加であり、樹木葬墓地の運営・経営側の樹木葬会員に対する里山保全に関する教育や里山での体験研修の場の提供を増やすなど積極的にアピールすることが必要であろう。

そして樹木葬会員集いへの参加率は男性の方が高い。前述した樹木葬墓地購入後の不安・不便などところに関する問いで、女性は交通の便を多く選んでいることから考えると、交通の便を改善することで女性の参加率も上げることが出来ると思われる。

樹木と魂の関係では女性のほうが男性より樹木に魂が宿ると信じたいという傾向が強いという結果が出た。男性は過半数以上が宿と思わないと応えており、否定的である。全体的にも宿ると信じたいと宿るとは思わないが各40.1%で同じである。またこういった樹木に対する考えは樹木葬墓地を誰のために契約したのかにより異なることでもない。樹木葬墓地は自分と配偶者用に購入した人が多く、特に60歳～64歳の女性に多い。樹木葬が持つ特徴から故人が樹木として生まれ変わるといふことに対して実際にはそうでないと思う人も多いといえ、樹木に対する執着も特別な対象に関係なく異なると考えられる。

一方で天徳寺で販売している米の購入に関しては米を購入したことがある会員は5割以上を占めており、男性で夫婦のみの世帯の人が多く買っていることがわかった。米の購入の理由について地域の農業活性化への貢献や有機栽培、お寺の仲介といった側面を評価している。特に有機栽培に関しては男女で有意差が見られ、女性の支持が高く、食の安全という面からも評価していることがわかる。このことから地域の経済や環境に貢献できるという樹木葬墓地の経営側の趣旨を会員も認識していると思われる。現段階では一軒の農家のみとの契約になっているが米は例年完売しているので今後の会員増に伴い、米を購入する会員が増えれば契約を結べる農家が増える可能性もある。その際には樹木葬墓地の経営側のいう「地域農業活性化や自然環境保全」への貢献も達成されよう。また米の購入に関する一部の意見から樹木葬の会員が女性や高齢、また単独世帯や夫婦だけの世帯が多いことを考慮し、小さい単位での米の販売や配達サービスといった販売での工夫が必要であると考えられる。

地域経済への貢献の面では一回の訪問での支出額は1万円～3万円が9割に近く、訪問地域についても限定的であり、地域経済に与える影響は比較的小さいと思われるが、周辺の観光地に寄る人も多少いることから樹木葬会員が増えればこういった大原地域のみならず周辺地域への影響も大きくなると考えられる。アンケートの結果ではないが著者の天徳寺への聞き取りから述べると、大原駅周辺で営業をしているタクシーは普段は一日5台くらいだが、天徳寺の行事がある

日は11台に増やして営業しており、タクシー会社の年間の収入が10%増えた。しかし訪問者は増えても前述したように地域での消費活動はあまり積極的ではないと判断できるので、樹木葬墓地の経営側は地域の商店街などとの連携で訪問者の消費活動を促せるような取り組みが課題であろう。

以上、樹木葬墓地を選択している人は先行研究での結果のように「脱継承」や「自然志向」の傾向を見せていることがわかった。また本調査での目的であった樹木葬墓地の趣旨である里山保全や地域活性化への貢献といった面も樹木葬墓地を選択した人の認識度は高く樹木葬墓地を経営・管理している側の意図している方向に向っているといえるだろう。しかし持続的な里山保全の実行や地域全体への経済効果を上げるためには樹木葬会員には60歳代の女性の関与が大きいことに着目して、上記で述べてきたような樹木葬墓地の経営・管理側の工夫が必要であり、地域全体との連携を視野に入れることが考えられるだろう。

謝 辞

アンケート調査にご協力をいただいた天徳寺樹木葬の会員及び関係者の方々に深く御礼申し上げます。

要 旨

近年、自然葬に注目が集まっている中、里山保全を目的とする樹木葬墓地を選ぶ人はどういった人で、里山保全の認識度及び地域経済への貢献度を明らかにするためアンケート調査を実施した。アンケートの対象は千葉県いすみ市大原に所在する天徳寺の樹木葬の会員である。

アンケート結果で属性をまとめると、女性が6割以上で、60歳代が多い。世帯構成では夫婦のみの世帯が多く、男女別で見ると男性は夫婦のみの世帯が、女性は単独世帯が多かった。また子どもがいるかどうかに関わらず子どもと同居していない会員が多いことが分かった。居住地は千葉県が6割以上であった。職業は男性の場合は無職が、女性の場合は主婦の割合が高かった。

次に樹木葬に対する意識をまとめると、樹木葬を選んだ理由としては「自然に還りたい」が最も多く選択された。価格に関しては安いという評価が多く、樹木葬墓地を購入したことに 대해서는8割以上の会員が満足していた。購入後に良かったとおもうところは里山保全や再生に貢献できるが最も多く選択された。逆に樹木葬を購入後に不便・不安なところに関しては、「不便・不安なところはない」という答えが一番多かった。樹木葬墓地への訪問は年に1~2回が一番多い。樹木葬会員の集いの参加率は5割弱で、参加者は会員同士で交流が出来るところを集いの参加理由として一番多く選択している。次に樹木と魂の関係について「樹木に魂が宿ると信じたい」と「宿ると思わない」が半々であった。

最後に里山保全と地域経済への影響に関しての意識をまとめると樹木葬墓地が里山保全に貢献できるとの意見が7割強であった。貢献できると思う理由としては「墓地として里山を利用・整備できるから」という意見が5割以上であった。天徳寺での米の購入に関しては購入したことがある会員が5割以上を占めた。米の購入の理由に関しては地域の農業活性化へ貢献できるとの回答が7割以上を占めた。天徳寺への1回の訪問あたりの支出費は1万円未満が5割以上を占め、インパクトは限られる。

樹木葬の選択の理由からみると里山保全という樹木葬の趣旨は賛同しているものの、最初は、

自然回帰と継承の問題が樹木葬墓地を希望することに多く働いているといえる。しかし、樹木葬を購入してよかったところに関する問いでわかるように樹木葬会員も樹木葬墓地を選択した後は自然回帰と継承の問題が解決されたため里山保全や地域活性化への貢献、また自然とのふれあいの楽しさのほうが大きくなり、樹木葬墓地の運営・経営側の目的と一致していくと考えられる。

里山保全のための持続的な管理はこれに参加する理解者を増やすことが重要であり、以上のことから樹木葬の会員は十分里山保全の理解者であるといえる。ただ、樹木葬墓地への年間の訪問数や集いへの参加率は低く、樹木葬墓地の運営・経営側の樹木葬会員に対する里山保全に関する教育や地域との関わりの場の提供を増やすなど積極的なアピールが課題であり、長期的かつ計画的に管理を行ってこそ将来的に里山保全につながるといえる。樹木葬墓地を含めもっと地域に来てもらうためには会員が地域に求めているものが何かを把握することや地域全体との連携が必要であろう。

キーワード： 樹木葬墓地・継承者・自然回帰・里山保全・地域経済

注・引用文献

- 1) 森謙二(1998)「墓地に関する意識調査」厚生科学特別研究事業. pp. 3, 26, 27
- 2) 平成20年2月19日「都立霊園における新たな墓所の供給と管理について」答申. 東京都公園審議会. p.2
- 3) 詳細は<http://www.shizensou.net/index.html>を参照
- 4) 千坂げんぼう(2007)樹木葬の世界, 本の森, 岩手, p.141, 及び聞き取り調査による。
- 5) 韓国の「葬事などに関する法律」の第2条の14に「樹木葬林」とは「『山林資源の造成及び管理に関する法律』(1)第2条第1号による山林に造成する自然葬地」であると定義されている。
- 6) 千坂峠峰・井上治代(2003)樹木葬を知る本. pp7-17, 三省堂, 東京. 及び知勝院や天徳寺での聞き取り調査による。
- 7) 横田睦(2008)樹木葬の現状の検証と将来の見通し. 用地ジャーナル195: pp. 44, 45, 47
- 8) 金亮希・永田信(2008)新たな墓地形態としての樹木葬墓地の現状と今後の課題. 林業経済711: pp.4, 14
- 9) 山田國廣(1994)里山トラスト. 北斗出版, 東京, p.10
- 10) 四手井網英(2000)里山のこと. 関西自然保護機関紙22(1): 71-77
- 11) 深町加津枝(2004)里山とは-その構造と地域性-. 森林科学42: 4-9
- 12) 森林・林業・木材辞典編集委員会(1999)森林・林業・木材辞典. 日本林業調査会, 東京, p.322
- 13) 武内和彦(2001)里山の自然をどうとらえるか. (里山の環境学. 鷲谷いづみ, 武内和彦, 恒川篤史編. 東京大学出版社, 東京). 3-4
- 14) 平成19年度森林及び林業の動向・平成20年度森林及び林業施策, 第169回国会(常会)提出, pp.81
- 15) 奥敬一(2004)里山と市民活動. 森林科学42: pp.24
- 16) 地域活性化とは何をもって図られるかについても議論があるがここでは地域の経済にどのくらい影響があるのかをその尺度として用いることにする。
- 17) ただし, 男女不明の回答が一つあり, 男女でのクロス集計の場合は有効回答数は165である。
- 18) 樹木葬は契約1件につき1ヶ所の埋蔵として数え, 桜葬の場合は焼骨の埋蔵1件につき1体として数えている。
- 19) 詳細は天徳寺樹木葬のホームページ, <http://www5f.biglobe.ne.jp/~tentokuji/>を参照。
- 20) 井上の調査は2002年に行われたものであり, この調査の結果が現在の知勝院の樹木葬の契約者の傾向であるとはかならずしも言いがたいことは断っておきたい。
- 21) 厚生労働省のホームページ, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life07/03.html>を参照。
- 22) 厚生労働省のホームページ, http://www1.mhlw.go.jp/toukei/rikon_8/rikon1.htmlを参照。

- 23) 平成 19 年 11 月 29 日「都立霊園における新たな墓所の供給と管理について」中間のまとめ、東京都公園審議会, pp.2

(2008 年 6 月 30 日受付)

(2009 年 3 月 16 日受理)

Summary

This research analyses a questionnaire survey of Afforested Burial Grounds Membership's attributes in relation to the conservation of *Satoyama* and its influence on regional economics. The respondents to the questionnaire were mostly female and people in their sixties. Afforested Burial was deliberately selected as a means of burial according to natural inclination. Seventy percent or more of the respondents stated that Afforested Burial Grounds contributed to the conservation of *Satoyama*. Moreover, regarding the desired use of Afforested Burial Grounds after purchase, many respondents answered that it contributed to the conservation of *Satoyama*. Average visitation rates to Afforested Burial Grounds were once or twice a year, costing up to 10,000 yen per visit.

Members of Afforested Burial Grounds already understood the agreement for the goal of conservation of *Satoyama*. However, the low rate of visiting and average expense undermines the impact on the regional economy. It can be said that a more positive call for participation and better management and cooperation with the region are necessary to improve this situation.

Key words: Afforested Burial Grounds, successor, Orientation of nature, Conservation of *Satoyama*, Regional economy